

Every extension of knowledge arises from making the conscious the unconscious.

Library News

Our business in this world is not to succeed, but to continue to fail in good spirits.

What is done can't be undone.
Library News Time flies
Library News What is done can't be undone.

contents

目次

特集
貴重本紹介

貴重本紹介シリーズ 5

モンテスキュー『法の精神』の 2種のイタリア語訳

—1773年アムステルダム版(ヴェネツィア版)と1777年ナポリ版



▲上記の図書は、本学図書館に所蔵されている1773年公刊されたアムステルダム版(ヴェネツィア版)【左】と1777年公刊されたナポリ版【右】である。

18世紀フランスの啓蒙思想家モンテスキューによる『法の精神』は、国家支配のあり方を共和政体、君主政体、専制政体という3種のモデルで説明する三政体論と、公民における政治的自由を保障するため

の仕組みとしての権力分立論を通じて著名である。

ここに紹介するのは、18世紀イタリアにおけるモンテスキューの思想の広がりや影響を知るための貴重な資料となる、2種のイタリア語訳である。まず、1757年のフランス語決定版に基づく最初の全訳として知られる1773年版は、扉にアムステルダム刊とあるが、実際にはヴェネツィアで刊行されたことが判っている。外国の刊行地名で出版された理由は、同地を支配していたヴェネツィア共和国に対して、『法の精神』が密告の奨励される自由の制約が大きい国家であるとの評価を示していることより、共和国当局による圧力を回避するためであろうと推測される。他方で1777年版は、本文テキストについて、訳出されている部分についても、訳語についても1773年版とほぼ完全に同一でありながら、本来の刊行地であるナポリの書店名が明記されている。扉の写真からも読み取れるように、この版は当時の代表的な経済学者であったジェノヴェージによる注釈の付加を特徴としている。ここで、彼がナポリにおけるブルボン王家による支配の擁護者であったことが知られていたことをふまえるならば、本学所蔵の2版の比較を通じて、当時における学術書出版への政治的権力による影響を如実に読み取ることもできるだろう。

随想 2

短期大学部教授 高田 豊實

国内外の図書館 3

経営学部教授 中西 昌武

読書ガイド 4

短期大学部教授 柿内 正徳

法学部教授 増田 輝夫

人間生活科学部講師 楯 誠

経済学部教授 宮川 昇

学生コーナー 6

経営学部 長野 愛子

短期大学部 伊藤 美保

経済学部 村井 美咲

人間生活科学部 土田 里沙

図書館からのお知らせ 8



▲1777年版冒頭部分。左頁にジュノヴェージ、右頁(中央円内)にモンテスキューの肖像が認められる。



法学部 講師
清水 裕樹



地球市民？



短期大学部 教授 高田 豊實

「地球市民」という言葉はこのごろ頻繁に使われるようになった。数年前、インターネットで検索すると、「地球市民」に言及したホームページが約4万件あり、すごいなと思ったことがある。ところがつい最近同様に検索すると、なんと948万件にも上っていた。日本国内で「地球市民」という言葉が急速に浸透していることをうかがわせるものだった。

関東のある大学には地球市民学科がある。地球市民学会もあるそうだ。地球市民というのは、名古屋市民とか、犬山市民とか言うのとは、違う何かを表現したいのだろう。

じつは、この「地球市民」という言葉は、これまで最近流行している「グローバル化」という言葉と関係している。「グローバル化」は地球を意味するグローブに由来する。物事が地球的規模で展開することを指している。地球規模で考えないと困る、ということに人々が気づいたのだ。

今日の、ヒト、モノ、おカネ、そして情報の移動、流通は、凄まじいと言うほかはない状況にある。企業活動は文字通り地球全体を視野に入れなければ、成り立たなくなった。夜も休むことができなくなった。「24時間戦えますか」というキャッチコピーを思い出す。もはや一つの国の中だけで物事が完結することは、考えられなくなった。環境問題も簡単に国境を超えてしまった。南極の水からPCBが検出されたし、地球温暖化が大きな問題になって来た。そして、一方での富の蓄積と、他方での貧困と飢餓の増大とが、進行したと言われている。

「地球市民」はそうした今日の状況から目をそらさずに、「地球社会」の一員として、その責任と役割を果たさねばならない。この言葉はそういうメッセージを私たちに投げかけているように思う。

ところで、「地球市民」という言葉を強調する人たちの中から、「国民」ではなくて「市民」なんだといった声が聴かれる。「国民」はいずれかの国に属している。そうすると「国民」は国のエゴを受け入れてしまう。また「国民」は国から指図を受けねばならない。これに対して、「市民」は国から自由であって、自分たちで物事を決めていくことができる、つまり自治ができるのだ。地球全体のことを考えるには、「国民」であることを脱して、「市民」とならなくてはいけないのだ。こうした主張だ。

果たしてこうした主張にリアリティがあるだろうか。地球上の大多数の人々は、自分の生まれ育った国に属し、そこで暮らしている。大多数の人々は、自分の国の運命から自由ではない。戦禍の続くイラクに住んでいる人たち、あるいは飢餓に苦しむ北朝鮮の人たちを思い浮かべてみると、国と運命をともにせざるを得ない、過酷な現実を理解することができるのではないか。地球全体のことを言う前に、明日のわが身、明日の家族の生活がどうなるかが重要なのだ。物事には優先順位がある。また、地球規模の問題を解決するには、世界各国の努力こそが重要になる。いわゆる「地球社会」の問題に取り組むのは、国際社会の仕事なのだと思うが、いかがであろうか。



シンガポール国立大学 付属図書館

経営学部 教授 中西 昌武

シンガポール国立大学は 2005 年に創立 100 周年を迎えた東南アジア屈指の名門大学である。小高い丘が続く広大なキャンパスの真ん中に大学中央図書館はある。丘のうねりの鞍部を選んで建てられたこの図書館は、丘と丘を結ぶ橋の中央に入口がある。丘の教室からは同じ回廊を歩いて、また鞍部にはバス停や CO-OP があるが、ここからはエレベータで 4 階まで昇って図書館に入る。入り口が図書館の最上階である。公用語は英語、しかし人口の 70% は華人、というこの国らしく、英米系の文献を中心とする本館と中国語文献を多く集めた中文分館が仲良く並んでいる。ただし高度の理工系専門書はここにはなく、理工系学部群に近いところにあるサイエンス図書館に収められている。

図書館内には、50 台ほどの自由使用パソコン室や、

30 人ほどの学生が利用できる学生談話室がある。自習用のデスクはたくさん設けられているが、朝から満席状態である。開架フロアは途方もなく広いが、フロアの端から端まで本がぎっしり詰まっている。膨大な蔵書数を誇るこの図書館は、デューイ十進分類法でなく、独自の分類体系を用いている。蔵書傾向は、実学的な書を好む印象が強い。またサイエンス図書館の場合は、基礎と応用、両分野とも充実している。この国の歴史と政策の反映であろうか。

他の先端大学と同様、この大学でも理工系学術雑誌の電子化を非常に強く推進しており、私は研究室にしながらにしてほとんどの雑誌文献を学内 LAN 経由で入手することができた。インターネット時代における図書館の働きのひとつを認識させてくれた体験だった。



挿絵は本人の手によるものです

アルビン・トフラー、ハイジトフラー 著
山岡 洋一 訳

『富の未来 (上・下)』

(上 376 頁, 下 351 頁) (講談社)

トーマス・フリードマン 著

伏見 威蕃 訳

『フラット化する世界 (上・下)』

(上 393 頁, 下 425 頁)

(日本経済新聞社)



短期大学部 教授
柿内 正徳



アルビン・トフラーは『第三の波』や『パワー・シフト』、『未来の衝撃』などによって広く知られる米国の代表的な知識人の一人である。また、トーマス・フリードマンは三度ものピューリッツァー賞に輝くジャーナリスト、コラムニストである。それぞれの最新作『富の未来』と『フラット化する世界』がともに昨年日本でも出版された。すでにひろく紹介され多くの書店で現在でも平積みコーナーに並べられているようなベストセラーとなっているものではあるが、今日のような歴史的に大きな転換期にある時代状況に鑑み、またその課題の重さの割には比較的に易しく説かれていて読みやすい内容となっているので、あらためてここにとりあげておきたい。『富の未来』はトフラー史観の集大成とも言えるもので、怒涛のように押し寄せる情報化の潮流を人類史的に、農耕の起源に始まり、近代での工業化・産業化に続く“第三の波”として捉えこれから始まろうとする新しい文明を雄渾に描く一つの歴史展開図である。それぞれの時代の基本的な価値観や生活様式、働き方や文化や権力の形態といったものが何によって支えられ変化してゆくものなのかが解りやすく説かれている。『フラット化する世界』では文字どおり、かつてコロンブスの新大陸発見によって地球の球形が広く認知され近代という時代が開かれたように、ネット化とグローバル化が一段と加速され世界の一体化が急速にすすむ現在の歴史状況を“地球のフラット化”ととらえ、近代の終焉とその転換の図式がしめされる。それはまさにグローバリズムと IT 革新の最前線でいま何が起っているかを如実に伝える現場からの的確なルポルタージュともなっている。ともに、誰もがひとしく「海図のない航海」に発たねばならないこのとき、「われわれはどこへ行くのか」を見つめ考えるための格好の材料を提供してくれている。



藤原 正彦 著

『国家の品格』

(191 頁) (新潮社新書)



法学部 教授
増田 輝夫



著者は、お茶の水女子大理学部数学科の教授である。偶々私の兄も東大の数学科教授として函教論の研究に携わっていたことから私自身数学には大変興味をもっている。

このような経歴の著者がわが国の政治、経済、教育等に対し、極めて鋭い意表をつく分析を本書の中で行っている。例えば、「教育崩壊による学力の低下、子供達の読書離れ、少年少女の非行はどの先進国でも問題になっています。世界中の先進国で同じ問題が生じて同じように困っているのにみんなどうしてよいか分からない。…この荒廃の真因はいったい何なのでしょうか。」著者は「私の考えでは、これは西欧的な論理・近代的な合理精神の破綻に他なりません。」と答えている

1931 年オーストリアの数学者ゲーデルが証明した「不完全性定理」によればどんなに立派な公理系があっても、その中に正しいか否かを判定できない命題が存在する。換言すれば論理にのみ頼ってはいは永久に判定できないことがある。では論理を徹底しても人間社会の問題がなぜ解決できないのか。その理由を 1「論理の限界」2「最も重要なことは論理で証明できない」3「論理には出発点が必要」4「論理は長くなり得ない」に求めている。その上で、日本が国家の品格を取り戻すためには論理偏重の欧米型文明に代わって日本人が育んできた「情緒」や武士道精神等に現われる「形」を重んずる日本型文明への復帰を提唱している。一読に値する書と思う。

読書ガイド

読書ガイドで紹介した本は図書館にあります。ぜひ一読ください。

岡本 夏木 著

『幼児期

—子どもは世界をどうつかむか—』

(230 頁) (岩波新書)



人間生活科学部 講師
楯 誠

保育系の学生は授業やゼミ活動の中で見聞きしたことがある本かもしれないが、改めて紹介しておきたい。本書は有名な発達心理学者である著者が幼児期という発達の一時期の持つ重要性を判りやすく述べたものである。著者は「情報社会」や「能力主義」といった世の中の流れが「幼児期の空洞化」を引き起こしている現状を危惧するとともに、「しつけ」、「遊び」、「表現」、「言葉」という4つのテーマに注目して幼児期の活動が子どもの発達にもたらすものや、これらのテーマに親を始めとする大人はどう関わっていくべきなのかについて多くの知見やヒントを与えてくれている。

それぞれのテーマに関する発達心理学の考え方と具体的な子ども達の活動を丁寧に関連づけて解説しており、読んでいて「なるほど。そういうことなのか」と目から鱗が落ちるような発見が幾つもあった。子どもという存在は面白い、心理学という学問は面白いと改めて感じさせてくれる本である。

本書の上げている4つのテーマはいずれも保育活動において重要なものであり、保育者志望の学生にとっては非常になじみのあるものではないだろうか。今まさに学習している保育活動の内容が、実は幼児期の子ども達にとってどのような意味を持っているのか。また、子どもの様々な日常的活動の持つ意味を理解するために今多くのことを学習しているのだ、ということを書きは気づかせてくれると思う。

斎藤 茂太 著

『いい言葉は、いい人生をつくる』

(237 頁) (成美文庫)

『(続)いい言葉は、いい人生をつくる』

(250 頁) (成美文庫)



経済学部 教授
宮川 昇

四十ウン年まえ、まだ私が文学青年だった頃、人生論といえば武者小路実篤と亀井勝一郎であつた。悩み多き青春を無事に過ごせたのは、両者の本の中に苦しみを解決する言葉が溢れていたからであつた。しかし、活字離れが叫ばれる現代の若者は、誰の言葉を人生の導き手とするのであろうか。若い歌手たちの歌を青春の道標としているのであろうか。元若者の私には、ポピュラーソングの歌詞では思索の深さが足りず心許ない。一抹の寂しさ感じていたとき、偶然に『いい言葉はいい人生をつくる』という本が目に入った。表題通りの、まさに「人生論」である。座右に置きたい格言が詰まった人生論である。数々の名言に感銘を受け、その後、『続・いい言葉はいい人生をつくる』も手に入れ、一気に読み終えた。

この本の筆者である斎藤茂太さんは、精神科医にして歌人である斎藤茂吉を父に、作家の北杜夫を弟に持ち、ご自身も精神科医で、かつ多くの著作を手がけた売れっ子作家でもある。この本は、「人生に失敗がないと、人生を失敗する」という類の筆者の言葉に、「どんなにベッドが温かくても、そこから出なくちゃいけない」というような偉人の名言を添えたエッセイ集で、文章の一区切りごとに、筆者の生きた90年以上の年輪がぎっしりと詰まっている。武者小路のような若き血に萌ゆる人生論ではないが、知らず知らずのうちに筆者が作り出す言葉の世界に嵌^{はま}ってしまふ老かいな人生論である。文章が平易なので、本の苦手な人でも容易に読破することができる。学生諸君が社会に出てから困難に直面した時、この二冊の本は道標となってくれるでしょう。

筆者は、昨年他界された。ご冥福をお祈りします。



ディー・レディー 著『あたしの一生 猫のダルシーの贈り物』を読んで

経営学部 長野 愛子

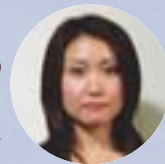
この物語は、ダルシーという猫が飼い主でありこの本の作者でもあるディー・レディーと過ごした一生の話です。この本は、全て猫の目から見た出来事や感情が書かれています。ですから、主人公はダルシーであり、飼い主は“あたしの人間”と表現されています。そのことももちろんおもしろいのですが、人間の視点から見た表現は一切されていないことにも驚きました。

このような形態の物語を読んだのは初めてだったので少し違和感がありましたが、私が思っていた人間が考える猫の感情とは全く違い、本当に猫が言葉を発し、教えてくれたのかと錯覚する程の細かな感情の変

化や行動が描かれていて、非常に新鮮で興味深いものでした。

この物語の大きなテーマは、「愛」だと思います。ただ純粋に“あたしの人間”を愛し抜き、全身で愛を伝える為だけに生きたダルシーの姿にとっても胸が熱くなりました。

飼う・飼われる、人間と動物という関係ではなく、対等の一对一の生き物同士として考えているのは、本当にお互いが大切で必要な存在だと思っているからだと感じました。動物と人間がこれ程までにわかり合えるのかと、これこそ本当の愛の形なのではないかと考えさせられた一冊でした。



義家 弘介 著『不良少年の夢』を読んで

短期大学部 伊藤 美保

みなさんは、北海道にある北星学園余市高等学校の教諭だった義家弘介という人を知ってますか？

『ヤンキー母校に帰る』のタイトルでドラマ化されテレビ放映されたこともあります。

家庭崩壊、高校退学、児童相談所から里親へ……札付きの不良少年に手を差し伸べてくれたのは、絶望的な気持で向った故郷を遠く離れた北の小さな私立高校、それが北星学園余市高等学校でした。

そこで初めて出会った彼にとっての真の教師が彼にくれた夢とはいったい何だったのでしょうか？

この学校の卒業式は、外見も内面も他校のものとはまったく違うものでした。

奇抜なドレスファッションの生徒、アフロヘアに袴で決めている生徒、朝早くから和服の着付けをしてめかしこんでいる生徒、スーツにサングラスの生徒、などなど。

どれも、世間一般で言うところの「普通」という概念からはずいぶんかけ離れた服装でした。

そしてその普通とかけ離れた容姿の主役たちは周りを気にすることなく、顔をクシャクシャにして泣いているのです。

それを見守る父母、そして共に戦ってきた教師たちの目からも、涙がとめどもなく流れ落ちているのです。

何にそんなに感動を覚えたのだろうか？そして何に安堵しているのだろうか？鳴咽は式の間中、体育館の至る所で続いていました。

一般的かどうかという観点からすると、この光景もまた明らかに普通の高校の卒業式とは異なるものでした。

涙の意味は、それぞれ違うだろうが、たった一つだけ共通していることがあるのです。

それは、この北の大地で過ごした三年間はまさに皆で泥まみれになって必死にがんばった歳月だったのです。

この本の中には、北星余市高校で実際にあった出来事や、それまでの義家さんの過去がいろいろ描かれています。

この本で、私は人間性の一面としての心の中の深い闇を垣間みるような恐怖感も覚えましたが、同時に義家さんというひとの真の優しさに触れることができ救われたような気持ちにもなりました。



中村 計, 木村 修一 共著『早実VS.駒大苫小牧』を読んで

経済学部 村井 美咲

今年の夏

といえば、高校野球に日本中が盛り上がっていた。誰しも一度はテレビで見たことがあるのではないだろうか。

数ある高校の中でも特に駒大苫小牧は、大会三連覇がかかっていることもあり、早くから注目を浴びていた。この本は決勝に残った早実、駒大苫小牧両チームの決勝と決勝再試合、二日間五時間半にわたる死闘を綴った一冊である。

この大会での見所は、なんと言っても両チームの斎藤祐樹、田中将人投手の戦いではないだろうか。斎藤投手はスタミナと技術面で優れていて、大会史上2番目となる記録奪三振78を残している。一方の田中選手は身長185センチと長身で、その腕から振り下ろされる剛速球と切れのいいス

ライダーで「怪物」と呼ばれた。決勝再試合、残り1アウトで早実の初優勝が決まる、斎藤投手の最後の相手は偶然にも田中投手であった。今でもあ

の激しい戦いが忘れられない。

大会が終わっても二人の人気が続き、約一ヵ月後の兵庫国体の舞台上で再び対戦することとなった時には、球場に入場制限を大きく上回る観客が詰め掛けた。この二人の今後の進路についても大きく報道された。

毎年ドラマがある高校野球だが、これほど胸に残ったのは初めてだった。本になることもなかなかないことである。私は、この本で高校野球史に残るこの大会をもう一度思い出すことができた。



長野県立子ども病院すずらの会 編『電池が切れるまで 子ども病院からのメッセージ』を読んで

人間生活科学部 土田 里沙

この本

は、長野県立子ども病院に長期入院している院内学級の子どもたちやその子どもたちの親から提出された詩を集めた本です。その中で、私は、宮越由貴奈ちゃんの「命」という詩に最も心を打たれました。「命」は、由貴奈ちゃんが4年生の時、院内学級で受けた理科授業「乾電池の実験」の直後に作られた作品だそうです。電池と関連づけて、命の大切さを教えてくれているように思います。また、由貴奈ちゃんは自分が重病であるにもかかわらず、他の人が落ち込んでいたりすると励まして、人一倍の思いやりを持って接していたことも、由貴奈ちゃんへの思いや感謝をつづった詩から伝わってきます。誰からも愛されていた由貴奈ちゃんは、11歳という若さで亡くなり、お葬式の時にこの「命」が朗読されました。

この病院に入院している子どもたちは、皆、

退院できることを信じ、リハビリや辛い治療を受けています。その子どもたちが書いた詩には、「辛いから死にたい」などという言葉は書かれていません。どんなに辛くても頑張るという思いがつづられているのです。

普通に歩いたり、寝たり、学校で勉強したり…私にとっては当たり前で何の変哲もない日常が、ここに入院している子どもたちにとっては、羨ましいことだということを知り、改めて、今、当たり前で生活をしている日常を大切に、悔いの残らない生活を送ろうと思いました。そして、嫌な事や辛いことがあっても、その時は「命」という詩を思い出し、生きていることが一番の幸せであること、その幸せを自分で奪ってしまわないようにしようと思いました。



学

生

コ

1

ナ

1

お知らせ Information

次を、次へ。



■図書館の施設についてのご案内

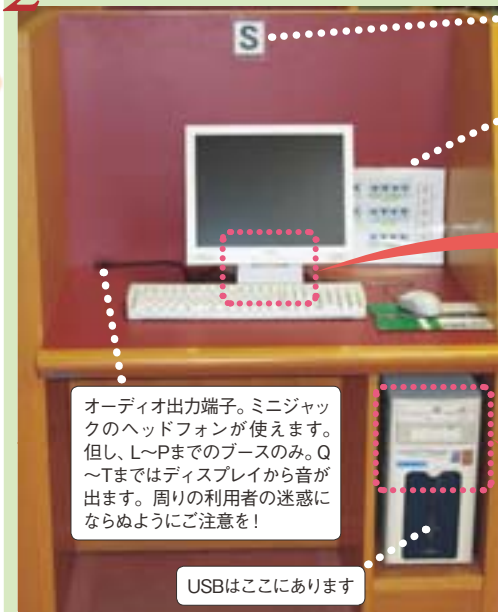
●2階のインターネットコーナーについて紹介します。

講義で出された課題の調査やレポート作成ができるよう図書館2階には20台のパソコンが設置されています。Windows XPをOSとしてMicrosoft Office 2003、一太郎Ver.15がインストールされています。プリンタもレーザープリンタ(A4用紙まで印刷可)が5台になりました。では手続き順を説明しましょう。

1 まずは1階受付カウンターへ

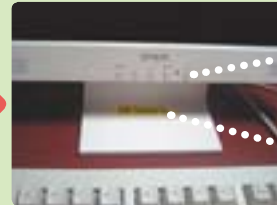
手続きは1階カウンターで「学生証」を提示し利用目的を伝えると「パソコン利用カード」が渡されます。2階の指定されたブースで利用して下さい。

2 インターネットコーナーでの利用



「パソコン利用カード」に記載されたアルファベットが示された場所で利用して下さい。A～Tまで表示されています。指定されたブース以外は電源を入れることができません。また、1階カウンターで手続きをしていない場合には使用中に電源が切れることもありますのでご注意ください。

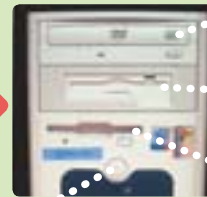
プリンタの使い方と割当の説明書。もってかないで(^_^)



ディスプレイの電源や調整をするボタンがあります。もし緑色のランプがついていない場合は「Power」ボタンを押してみてください。

ここに通常使用するプリンタが表示されています。

CDやDVDが読み込めます。但し書き込むことはできません。残念!



MOドライブです。640MBのディスクが使えます。フロッピーは入れないで! 取れなくなることがあります。うっかり入れてしまったらすぐに1階カウンターへ!

こちらがフロッピーディスクです!

電源ボタンです。押すと電源が入ります。電源が入っている状態で押し続けると強制的に電源が切れます。但しファイルが壊れる可能性があります。

このパソコンは電源をON/OFFする事により全て元の状態に戻ってしまいます。**必要なデータはこまめにFD、MO、USBメモリなどに保存しておいて下さい。**それまでの作業が無駄にならないように!!

3 利用が終わったら1階受付カウンターへ

利用したパソコンは必ず「シャットダウン」して電源が切れたことを確認してから1階カウンターへ来て下さい。その時には必ず「パソコン利用カード」を返却して「シャットダウン」したことを報告して下さい。

インターネットコーナーのパソコンやプリンタはみんなで利用する機械です。いつも快適に利用できるように大切に扱って下さい。万一故障した場合弁償をお願いすることがありますのでご注意ください。

■寄贈資料のご案内

本学名誉教授(元館長)武井満男氏から『原子力と国際政治』等 原子力関係の図書を多数寄贈していただきました。

また、本学卒業生 坂野みほ子氏より『司法試験にでる民法』等 司法試験受験教材の資料を寄贈していただきました。詳細は館員にお尋ねください。

■名経祭バザーに際してのお礼

平成18年度名経祭バザーに際し、図書等を関係者から多数ご提供していただきありがとうございました。バザーの売上の一部で『手紙』『若者はなぜ3年で辞めるのか?』『卒論を書こう』『就職面接シミュレーション』等図書や、2階パソコンコーナーで利用できるメモリを購入しました。メモリについては、1階カウンターでお尋ねください。

図書館だより Vol.53 2007.4

発行所 名古屋経済大学 図書館

発行 年2回

印刷所 株式会社 一誠社 TEL (052) 851-1171

〒484-0000 愛知県犬山市樋池 61-22 TEL (0568) 67-3798 (代)

ホームページ <http://www.nagoya-ku.ac.jp/lib/index.html>